

いけのした 池ノ下遺跡

— 古代の鉄人たちの暮らしと祈り —

調査研究員 根本 岳 史

池ノ下遺跡の立地と周辺遺跡

池ノ下遺跡は印西市の東部、本埜村との境界付近に位置し、手賀沼に流れ込む亀成川北岸300m、標高22～26mの台地上に所在する。本遺跡の周辺は、7世紀後半に創建された瓦葺の古代寺院である木下別所廃寺をはじめ、その瓦を焼いた窯跡、住居跡や製鉄遺構・炭窯が検出された曾谷ノ窪瓦窯跡、縄文時代から利用された複合遺跡である大森天神台遺跡、2塔の瓦塔が出土した馬込遺跡のほか、稲荷峠遺跡、東遺跡、馬場遺跡、駒形北遺跡などの集落跡が確認されており、奈良・平安時代の遺跡が多く発見されている地域である。

遺跡の概要

今回の発掘調査は市道建設に伴い、4,650㎡を対象に平成18年10～12月にかけて実施された。調査の結果、7世紀末から9世紀、奈良・平安時代の住居跡14軒、掘立柱建物跡10棟、鍛冶炉1基、土坑28基を主体として、縄文時代の土坑5基、近世の地下式坑2基を含む土坑10基、溝7条が検出された。主体となる奈良・平安時代の遺物には、土師器（墨書土器）、須恵器、鉄製品（刀子・銚子^{とうす やじり}・鏃）、石製品（砥石・紡錘車）、土製品（支脚・手捏ね土器^{てづく}）、製鉄関連遺物（羽口^{はぐち}・鉄滓^{てつさい}・鍛造剥片）などが出土している。

調査の成果

次に主体となる奈良・平安時代の遺構について主だったものを概観してみよう。

〈3号住居跡（8世紀後葉）〉

南側調査区中央部に位置する。1辺約5mで、多量の炭化物や焼土が検出されたことから、焼失住居であると考えられる。また、柱穴の形状から建て替えが行われたと推測される。出土遺物は土師器が主体であり、墨書のものが多い。後述する長文墨書が

施された小型の土師器甕のほか、炭化した桃の種などが検出されている。

〈4号住居跡（9世紀前葉）〉

南側調査区、3号住居跡の東に位置している。1辺3m程度の小規模な住居であり、柱穴や周溝も確認されていない。遺物の量はそれほど多くはないが、椀形・板状などの鉄滓や、炉に風を送るための羽口が出土していることから、鉄を作った工房跡と考えられる。

〈14号住居跡（9世紀後葉）〉

北側調査区中央部に位置しており、1辺約4mを測る。東西のみに周溝が検出され、柱穴は確認できなかった。遺物は比較的豊富に出土しており、内容は土師器蓋・杯・高台付杯・皿・甕、須恵器長頸壺・甕・甑^{こしき}など多様である。特に墨書土器が多く出土しており、『町』『本任』『八月』『黒』『黒富』『利』などの文字が確認されている。

〈6号掘立柱建物跡（9世紀後葉）〉

南側調査区中央部東側に位置する。調査区の関係上、遺構の全形は検出されていないが、身屋^{もや}が3×2間の四面廂建物^{しめんびさし}と考えられる。周辺住居跡から墨書土器が出土している点などから考えると、村落内寺院として機能していた可能性がある。

〈鍛冶炉（9世紀前葉）〉

南側調査区中央、4号住居跡の南に隣接し、燃焼部と考えられる円形の掘り込みと、溝状の掘り込みから構成される。総計10kgを超える椀状・粒状の鉄滓、鍛造剥片、羽口などが出土し、精錬鍛冶のみならず鍛造鍛冶が行われたことが証明された。また、鉄製品が出土していることから、仕上げ作業も行われていたのではないだろうか。

長文墨書土器の示すもの

〈墨書土器とは〉

その名のとおおり、墨で文字が書かれた土器である。文字が広く普及した奈良・平安時代、8世紀初頭に出現し、9世紀代に全盛を迎え、10世紀には急速に減少する。千葉県は全国で最も出土例が多く、その中でも本遺跡の所在する印旛沼周辺を中心とした下総地域が圧倒的に多い。

〈文章の内容〉

文章は2段に分かれており、上段には『下総国埴生郡酢取郷車持□(部か)・・・』、下段には『□(延か)暦二年正月十四・・・』と書かれている。文章構成は国+郡+郷+名前・・・日付となっている。この表現方法は日常の行政文書と同じ形式である。文意は、延暦二年の正月十四日、下総国^{はにゆう}埴生郡、酢取郷^{すとり}に住む車持部^{くらもちべ}の人物が、なんらかの意図を持ってこの土器を使用した、ということであろう。

古代における下総国は現在の千葉県北部を中心に、茨城県及び東京都の一部にまたがっていた。埴生郡は現在の栄町、龍角寺周辺に郡家^{ぐうけ}をもち、成田市の東部を含む地域である。

酢取郷は現在正確な場所はわかっていないが、本遺跡は埴生郡ではなく印旛郡域であると考えられており、今回の出土はその行政区分のあり方に一考を与えるものとなった。

また、車持氏は、天皇の乗輿^{じょうよ}を製作、管理することを職業とした氏族であり、その職務を果たすための費用を貢納する車持部を与えられていた。

延暦二年は西暦783年にあたり、平城京から長岡京に遷都する前年になる。

〈機能〉

本土器は文章が一部欠けているため、何が書かれていたか、ということを文脈から読み取ることはできない。しかし、欠けている部分が、他遺跡の長文の墨書土器にかかっている「召代」などの部分であるとするならば、延命祭祀が行われた可能性がある。『日本霊異記』にある、「閻羅王の使い鬼、召さるる人の饗を受けて、恩を奉ずる縁」などの記述をみると、延命・長寿が古代の人々の強い関心事であっ

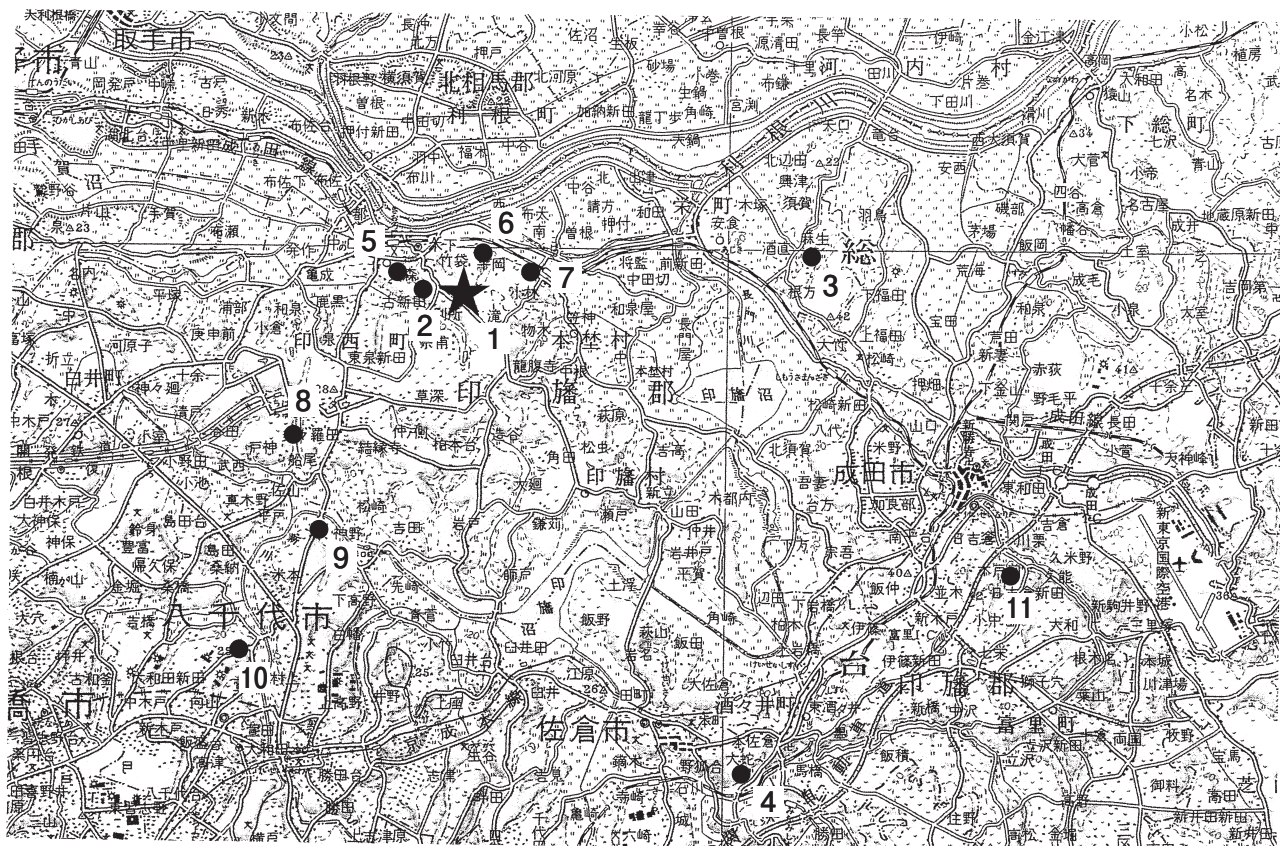
たことが理解できるだろう。本土器も、そのような目的で作られたものである可能性は高い。

桃の種と道教思想

また、3号住居跡からは、炭化した桃の種が発見されていることも興味深い。桃は中国原産で、弥生時代には日本に伝えられたと言われている。古代中国では仙果と呼ばれ、邪気をはらい、不老長寿を与える果実として珍重されていた。日本においても『古事記』の中で伊弉諾尊（いざなぎのみこと）が桃を投げつけることによって鬼女、黄泉醜女（よもつしこめ）を退散させ、伊弉諾尊はその功を称え、桃に大神実命（おおかむづみのみこと）の名を与えたという記述も残されている。その桃の種が延命を願う墨書土器と共に出土したということは、土器を奉じた人物が、桃を食すことによってさらに強く願いをかけたのではないかと考えるのは飛躍しすぎであろうか。いずれにせよ、当時の人々の信仰や長寿への祈りを、鮮やかによみがえらせてくれる貴重な資料であることは間違いない。

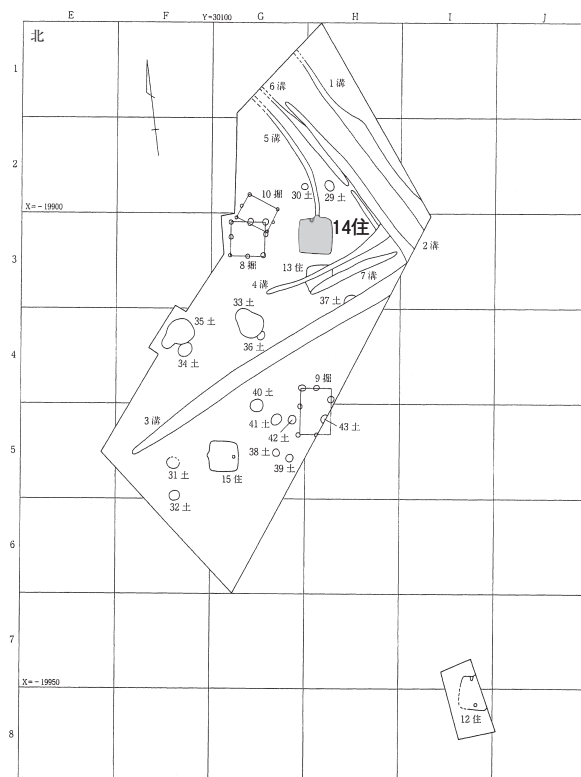
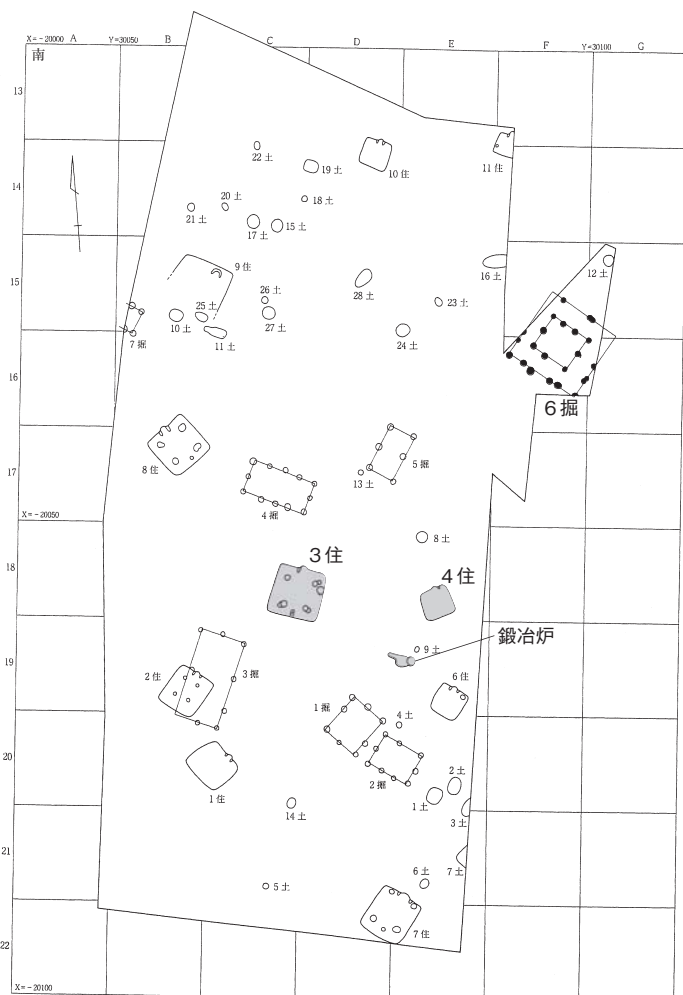
まとめ

池ノ下遺跡の周辺には、7世紀後半に建立されたと考えられる、瓦葺の木下別所廃寺がある。これは印旛沼周辺地域では栄町・龍角寺に次ぐ創建であり、瓦葺の初期古代寺院は他に佐倉市・長熊廃寺が知られている。その建立には、古墳時代から勢力を持っていた印波国造^{いんぱくにのみやつこ}を初めとした有力な豪族が関係していると考えられ、当地域にもそのような人々の拠点があった可能性が高い。その勢力を基盤として木下別所廃寺が建てられ、池ノ下遺跡を含む古代の集落が展開していくのであろう。先述したように当該期の遺跡はいくつか調査されているが、いまだ大部分が未調査であり、当時の全容を解明するまでには至っていない。今後の資料の増加、研究の進展により、今回出土した墨書土器の位置づけも含めて、古代の「香取海」^{かとりうみ}を取り巻く、人間の営みが復元されることが期待される。

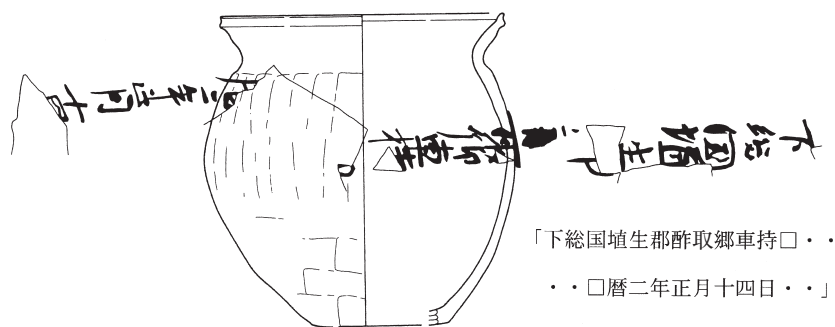


第1図 周辺の遺跡 (S=1/200,000)

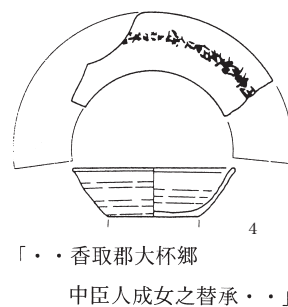
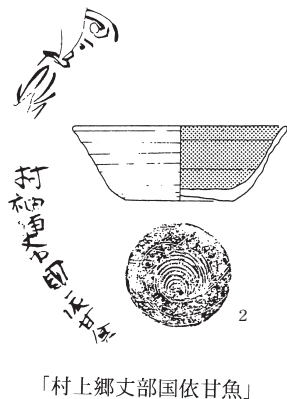
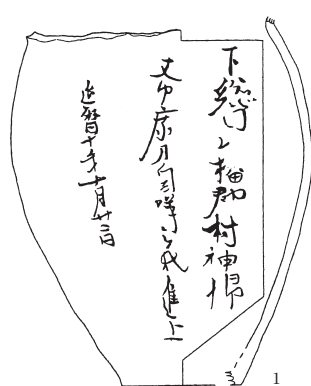
1. 池ノ下遺跡 2. 木下別所廃寺 3. 龍角寺
4. 長熊廃寺 5. 曾谷ノ窪瓦窯跡 6. 馬込遺跡
7. 馬場遺跡 8. 鳴神山遺跡 9. 上谷遺跡
10. 権現後遺跡 11. 久能高野遺跡



第2図 調査区遺構配置図 (S=1/800)



第3図 3号住居跡から出土した墨書土器と桃の種



「下総国印旛郡村神郷丈部□刀自咩召代
進上延暦十二年十月廿二日」

1. 八千代市上谷遺跡 2. 八千代市権現後遺跡 3. 印西市鳴神山遺跡
4. 佐原市吉原山王遺跡

第4図 長文墨書土器



3号住居跡



3号住居跡出土遺物



調査区全景



鍛冶炉出土遺物